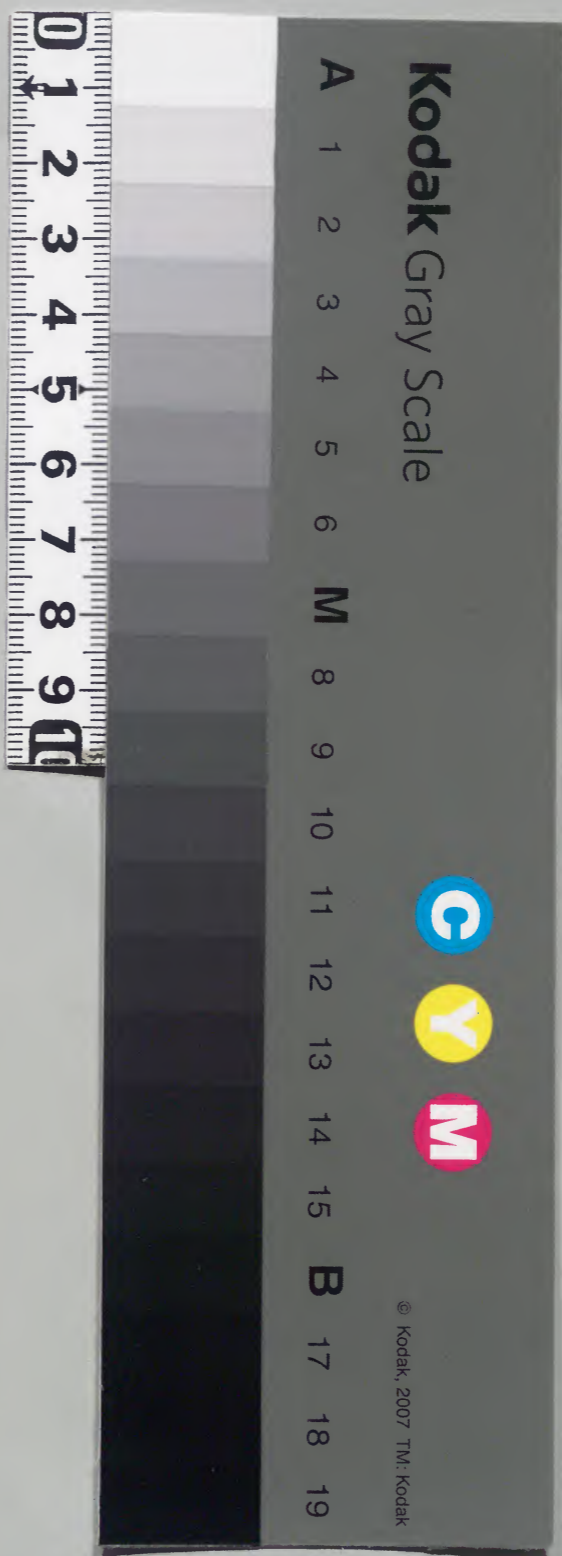


108

寛永諸家譜

藤原氏辛二冊之内一
頼宗流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (108)
函號	76 1





大澤

寛永諸家系圖傳

藤原氏

辛一 小家

賴宗流

大澤

淺草文庫

大織冠十三代

● 賴宗

御堂園白通長云次男 右大臣

右大将 梅察使 位一位

中御門 持明院 白河 高倉等此祀

後家

右大臣 正二位

基頼

持明院の祀 能覚越前守乃守

中務大輔

法守府將軍乃 宣旨をうりし

といども 辞をく昇殿せど

通基

安樂光院を草創と云といるども
周備せず馬乃道と云いみ
齋大と云はじよく武略は達し
小玉の凶穢と追討と云はゆへり
あつてび將軍の 宣旨と云いぬ家

持明院と号し 能覚守 右京大夫
正四位下

基家 もとけ

右京大夫 うきやうのだいふ 正二位 ただ 権中納言 えんちゅうなごん

基宗 もとむね

中将 ちゆうじやう 従二位 じゆうに

家能 いけのぶ

検校南 けんぎやうなん 正二位 ただ 権中納言 えんちゅうなごん

家定 いけさだ

右中納言 うぢちゆうなごん 権中納言 えんちゅうなごん

基盛 もとさか

右中納言 うぢちゆうなごん 正四位下 ただしゆいげ

基長 もとちやう

右中納言 うぢちゆうなごん 従二位 じゆうに

家藤 いへたか

中納 なかのうけ

後之佐 のちのすけ

基秀 もとひで

中納 なかのうけ

貞治乃ら まこと を治り をさ せむ せむ 事 こと

基久 もとひさ

右衛門 ゑもん 佐 すけ

生 なま 出 で 逢 あ 江 え

丹波乃 たんばの 出大澤 でいさ を を 願 ねが 知 ち 乃 の 小 こ 乃 の

大 おほ 一 いち 乃 の 久 ひさ く く 大 おほ 沢 さか と と 号 ごう 乃 の

某 それなり

治部大輔 ちぶのこみ

某 たけが

右為依 さへんのか

某

右為依 うひやうのか

某

治部大輔 ちぶのこみ

某

右為依

某

治部大輔

某

右為依

基相 もとむね

治部大輔

基胤 もとむね

右為依

永祿十二年

東照大権現 とうしょうだいこんげん 号と引ひく なな 彦列 ひこ 行

入寺 いりやう 尚 なほ 不 なほ 記 し 基胤 もとむね 今川氏 いまがわうぢ 共 とも 行

余一そ堀江乃城と申す中安
兵部少輔ハ一族ヲ統リし者ニ丸と
申す一じ権田職中佐ハ加勢トシテ
此の如く此城ヲ築ルベシ

大権現官馬を此城にじ者給ひ
とりてをうめく伊谷三人と申す
此けをいふとをいふと申す
海糸とを列おかす

大権現乃御するありい教とす

基胤氏真ノ余一そ堀江乃城を
たまつ事と御感しおかし

大権現の魔下り余一そ堀江乃城
をいふの 命ありけり御折書と
をいふ

敬白起清文之事

一高城居御事

一清事扱云事一之間敷事

一本地河モ如前ノ為新居智地呉松

相遠之同安事

一商知り分請石入再商城下

法成殿山海左可為必あ之事

一於萬事一慮既亦於ある者所人

と為先丁象弘明之事

永禄十二己酉

四月十二日家康

大澤左衛門尉殿

酒井左衛門尉石川伯耆守も又哲也事と
中安寺少輔殿
相田織甲佐殿

年号
月日同あ

大澤左衛門尉殿

中安寺少輔殿

酒井左衛門尉忠次判
石川伯耆守教正判

檀田減平依反

此とき基胤

大権現より湯みづかきよりくまの

元龜三年三方原合戦のとき

大権現加勢とす為りり基胤とあふ

くあつ堀乃城とりりこまは此とき

基宿もとの知少ちりりくあつ濱松はまり居ゐと

是又七年六月廿八日八十歳よく

卒しとし法名ほ月げに

基宿

長部大補 右近衛権中将 生國

孝江

天正九年夏列戸倉合戦より

中多能な佐さああがあ身みありありあくく名なと

同十八年武列 若築合戦のとき

基宿中多能中將大補忠務が身より

あり中多能英信えいしんとあありあくく一いははよ

居いらら忠ちゆう務む一いくくびび之の後の必ひつ
小せう湫しゆう一いありとむむらら

大だい権けん現げん一い湯たう一いくくままらら家け

天てん長ちやう五ご年ねん圓えん原げん凱がい旋げん乃のらら基き宿しゆくが

本ほん領りやう遠えん別べつ友ゆう知ち郡ぐん村むら櫛し庄じやう内うち一い

ををひひくく嶺りやう地ちをを一い南なん一いりりああままるる乃の庄じやう

今いま切き開かい一い乃の書しよをを一いつつとと書しよ

同どう六りく年ねん

大だい権けん現げんのの法ほふ執しやく奏そう并へい伊い呂りよ部ぶ少せう輔ほ直ちやく政せい後ご一い

修しゆ下げ一い叙しよととけけとと起き基き宿しゆくもも又また侍しやく後ご一い
但たどど一いこれこれ持ち明めい院えんのの家け流りゆう一い乃の書しよをを一いつつとと書しよ
なり

同どう十じゆ四しよ年ねん九きゆう月げつ二に十じゆ日にち少せうぬぬ一い但たどど

大だい権けん現げん基き宿しゆくととああくく持ち家け門もん誅しゆ法ほふ云い家け

乃の事じ一いとと被い落らくせせ一いのの法ほふ一い乃のらら

右みぎ法ほふ院えん一い乃の書しよをを一いつつとと書しよ

おおかかせせふふ一い乃の書しよをを一いつつとと書しよ満まん云い家け誅しゆ法ほふ云い家け

をを一いつつとと書しよ

朝鮮使洋礼披露此後と勅
事由

鴻津氏琉球王と云ふく来府

と云ふ此に起基宿 御命を付し海

らりく 肅礼披露此事をつとむ

豊后秀頼二條よとひく

大権現より湯見乃ここ秀頼缺と

と云ふ此を日と披露と云ふ 上使

少く大坂より秀頼より湯と

毎歲 禁中へ新年此御つとひと

此と云

台座院殿より

大権現より 缺一 幸南ふ 年 治乃

御大日披露と此と云

為軍家より

台座院殿より 幸南ふ 年 治乃

御大日披露 毎歳一 是とつと云

元和九年十二月八日申將より

寛永九年二月二條一坊幸此とき
法云家門跡(寺南)に及つて
と

同年

右徳院殿太政大臣一任(一)に及ぶ
河法云家(一)に及ぶ(一)に及ぶ
と(一)に及ぶ(一)に及ぶ

同十七年正月二十七日七十六歳小
一(一)に及ぶ(一)に及ぶ

基雄

忠治郎 生國因家

二十二歳

右徳院殿(一)に及ぶ(一)に及ぶ

忠治郎此(一)に及ぶ(一)に及ぶ

右(一)に及ぶ(一)に及ぶ

右(一)に及ぶ(一)に及ぶ

右(一)に及ぶ(一)に及ぶ

右(一)に及ぶ(一)に及ぶ

紀元あり 米地とくまを備ふ
乃ち伏見の御番とつとめ二年
しそり又加信此領地と終ふ
同十九日大坂御陣のとき
たび伏見の城に在番と
元和名に大坂再陣のとき伏見
在番乃士百人乃うら五十人
備有
とくまの旨 嚴令あり 牧野
内通政伝成が一紀元ありとす

基雄も備ふ 紀元あり
とくまの旨 嚴令あり 牧野
内通政伝成が一紀元ありとす

寛永十七年十月十五日七十
二歳小く死す

基元

友近 生武藏

十五歳より

右徳院殿

將軍家より行ふたたく南の院

基之

六ヶ泉尉

寛永十六年七月より一終く

將軍家より一終くまうり大御書

を流しむ

基重

右京亮

後五位下

生家喜江

九歳乃と起

大権現乃御命より一終く侍流

何とけ年より一終く

右徳院殿より一終く

大坂両度の御陣より水野隼人

一終く一終く

時二年
十三十四

五月七日乃戰場見乃見

基益しき

小侯ここう乃な乃な耐た 生なま回まわ乃な

基益しき曲まが乃な年とし少すく大澤おほさわがが家いえ乃な氏うぢ
をを胃い一ひと小侯ここうとと号ごう乃な

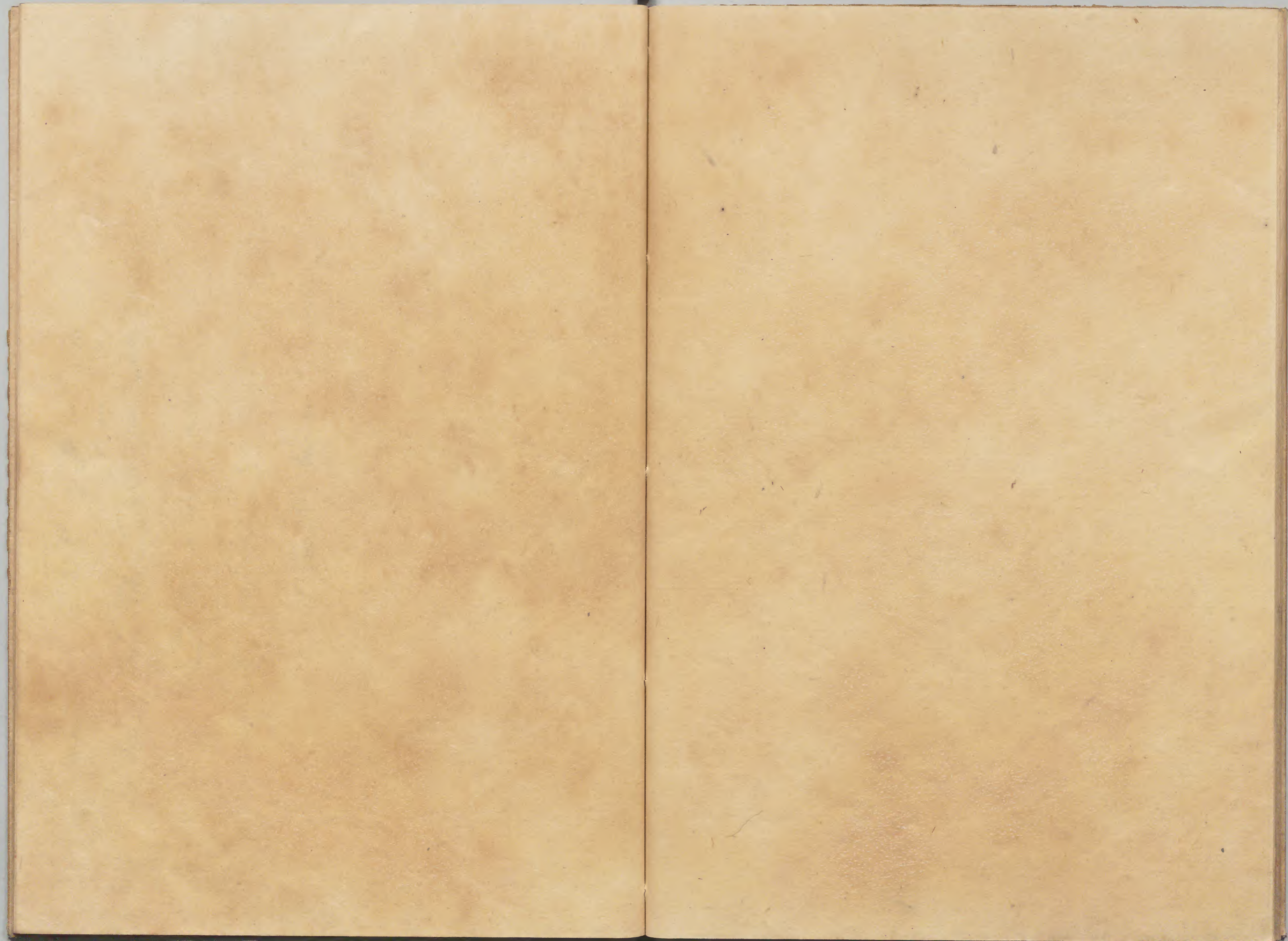
基将しきしょう

文ぶん乃な

基負しきふ

右みぎ近ちか

家いえ乃な飯いひ 吉きちのの系けい乃な丸まる



● 正伝

大澤

和泉守 兼 美員法

織田信長よりつふ乃ら浪人となり

法別よりありしかれとさ尾列大山北

家老生駒通春法別橋本城山崎と

ゆきり正伝正秀とある一くおらりて

天文二十一年閏正月朔日の朝いそふ
ゆきこれらを攻通秀と討あはすけ
しつゝ母坂山城守慶英一して太刀一腰
き洞百せうびと膽比五子八百四十
ふ費とけふ
永禄十年九月四日信長徳列り
發向ちく輪紫山入り入とて浪人
たりて死す

正秀

次郎左衛門尉 兼 同前

信長より了正信とあはく浪人

中たり後書居秀吉らあはく秀次

小治久二千石の地を膽と秀次六百

石を加倍一と都合二子六百石と知

寸うたち向し浪人ありて小田原

信とけとま

東照大権現大久保相模守を御つとひと

ちくちくしりしりしりしりしりのり
為最あり此節ふふ痛死と歳
七十六法名泰因

正重

次郎左衛門尉

生末月前

大権現

名徳院殿小法師とくくまらり大坂陣
し供養とせら

將軍家乃約命とくもふらりく大
御書乃御法とあり
寛永二年四十一歳小しと死す

治良

次郎左衛門尉

生末武藏

寛永十六年より大御書とつとす

家世級丸の月と創梅梅内 次郎

